

中央大学 2025 年度特別入試 【解答・解答例】

| | |
|---------|-----------------|
| 学部・試験方式 | 総合政策学部・スポーツ推薦入試 |
| 科目 | 小論文 |

※本件についての質問・照会には、個別に回答することはいたしません。

※公開する解答・解答例には、別解がある場合があります。

【解答・解答例】

問 1

大学スポーツ界では、複合的かつ構造的な問題が存在していることが課題文から読み取れる。

第 1 に、選手の精神的健康に関する問題がある。米国ジョージア工科大学の元体育局長が指摘するように、選手たちは大きな重圧から精神的疲労やうつ病、燃え尽き症候群に陥りやすく、その結果として違法薬物や大麻に手を出す事例が生じている。

第 2 に、組織のガバナンス不全が挙げられる。日大アメフト部の事例では、監督やコーチ陣が違法薬物使用を認識しながら適切に対処しなかった。米国では、コンプライアンスオフィサーの設置や選手の行動規範の制定など、組織的な監視体制が整備されているのと対照的である。

第 3 に、スポーツと学業の両立の難しさも課題である。「スポーツ優先で学業が軽視されがち」と指摘されており、競技活動に偏重した環境が、学生としての本分を見失わせる一因となっている。

さらに、応用神経科学者の指摘にあるように、体罰や嫌がらせ、SNS での誹謗中傷など「悪い」ストレスが選手の成長を妨げ、結果として不適切な行動を誘発するメカニズムも問題視されている。これらの複合的な要因が大学スポーツ界の不幸事を生み出す土壌となっている。

問 2

大学スポーツ界の問題解消には、「選手の成長」と「組織の健全化」の両面からアプローチする必要があると考える。

第 1 に、米国の NCAA 加盟大学のようなコンプライアンス体制が重要だ。各大学に専門オフィサーを配置し、選手やコーチの行動を把握すべきである。私が所属する高校バスケット部では、月に一度精神科医が訪問し選手のメンタルケアを行っていた。この仕組みで部内の問題を早期発見できた経験から、大学スポーツにも専門家の関与が必要だと確信している。

第 2 に、近畿大学の「スポーツチームアセスメント」のような第三者評価システムの導入も有効だ。私の高校部活では外部コーチを招き匿名で意見交換する機会があり、これが指導者の独断を防いでいた。「外部の目」は閉鎖的になりがちな部活動の透明性を高める効果がある。

第 3 に、立教大学のように学業とスポーツの両立を支援する体制も必要である。私の先輩が通う日本体育大学では、アスリート向けの学習支援センターがあり、遠征や試合で欠席した授業のフォローを行っている。このような支援を全国の大学に広げるべきだ。

第 4 に、ストレスマネジメントや倫理教育の充実も重要である。ジョージア工科大学の「CHAMPS」プログラムのような人間的成長を促す教育の導入と、青砥氏が指摘する「いい」ストレスに集中できる

環境づくりが不可欠だ。

これらの多角的アプローチにより、大学スポーツ界の健全な発展と不祥事防止を実現できるであろう。